

「現地を訪問して想うこと」

田中 克実 (1982・法)
宮城県コース参加

あの3月11日は、群馬県で勤務しており、県内出張に出ていた。用務を済ませて帰ろうとしたところ、高速バスが待てども来ない。JRの駅へ出てみると、地震で関東地方のJRが不通とのことだけで情報は何も入らず、数時間後に茨城県の家族と携帯電話が繋がり、東日本大震災の発生を知り、翌朝、飲料水や食料を車に積み込んで茨城県に戻った。幸い、家族に人的被害はなく、自宅の一部損壊で済んだが、ガソリン不足、計画停電、交通機関の不通などの状態が続き、自分の目の前の問題への対処に精一杯で、東北地方の状況を理解するまでには時間を要した。

その後、職場を通じて、東北地方（青森を含む4県）及び関東地方（茨城及び千葉）の情報が入り、特に、宮城県沿岸部及び福島県浜通りの被害には言葉を失った。南三陸ホテル観洋の露天風呂からみる美しい海、潮干狩りを楽しんだ相馬市松川浦などが思い出され、震災や原発事故の被害の甚大さにショックを受けた。

群馬県から北海道へと転勤になり、被災地を訪れる機会がなかったところ、今春（平成27年4月）に凶らずも福島県へ異動となった。福島県内の各地を仕事で訪れる中で、震災や原発事故の影響で避難を続けておられる方々の現状を目の当たりにし、「復興」という言葉は短期間のものではないと考えさせられた。

そして、隣県の宮城県の被災地も訪ねてみたいとは思っていたところ、校友会の本事業を知って参加させていただいた。女川の「復興町づくり情報交流館」の模型を頭に入れながら現地の状況を把握したところ、津波の高さに驚くとともに、地形的にも被害が広範囲に及んだことに衝撃を受けた。JR女川駅が完成し、徐々にではあるが、新しい町づくりが行われている様子ではあったが、町の方々の笑顔を拝見できるまでにはまだまだ時間を要するものと推察された。また、荒浜地区から閑上地区にかけては、道路両側に更地や建物の基礎しか残っていない場所が続き、津波が広範囲に陸地を浸食したことをまざまざと思い知らされ、現地に足を運ばないと分からないような、言葉にはならない感覚があった。

閑上地区でかまぼこ工場を営まれていた「ささ圭」の佐々木御夫妻からは、震災被害の現状をおうかがいした。工場再建に至った現状にもお話が及び、大変な御苦勞を乗り越えられてきた力強さに感激した。

二日間の短い日程ではあったが、被災地の現状を学ばせていただき、宮城県校友会の方々の御配慮に感謝している。参加者が、自分の目を見て、耳で聞いたことをSNSなどで発信し、短期間ではなせない「復興」を引き続き支援することを期待したい。

私も、当面は福島県に居住しているため、ここ福島県で復興支援のために何ができるか、小さな手かもしれないが、継続的に関与していけるものを見つけたいと考えている。